

中古宕江撮入声字と北京語口語音

佐 藤 昭*

“Entering-tone” Words of the Ancient Chinese Dang-Jiang rime-group and their Colloquial Pronunciations in the Peking Dialect

Akira SATOH*

§1. はじめに

現代北京語には、漢字一字で二通りの発音をもっていて、その発音が、一方が「文語音」、他方が「口語音」という対立をなしている例がたくさんある。それらのなかには、中古中国語（あるいは中古音）¹⁾において「入声」であったというものがすくなくない。そのような漢字としては、つぎのようなものがある²⁾。

	文語音	口語音		文語音	口語音
「北」	bò	běi	「黒」	hè	hēi
「麦」	mò	mài	「宅」	zhè	zhái
「六」	lù	liù	「熟」	shú	shóu
「鑿」	zuò	záo	「芍」	shuó	sháo
「剝」	bō	bāo	「学」	xué	xiáo

周知のごとく、「入声」とは、中古中国語において、平・上・去声とともに「四声」を構成する声調の一種であるが、他の声調とちがって、音節末尾（あるいは韻尾）に -p, -t, -k (学者によっては、この他に -c あるいは -wk)³⁾ といった閉鎖音をともなうものである。いっぽう、中古中国語の韻母を分類・整理したものに「十六攝」というのがある。「攝」とは、韻母を構成する諸要素のうち、韻尾が共通で、主母音が同じかまたは相近いものどうしをまとめたもので、これには、果・仮・遇・蟹・止・効・流・咸・深・山・臻・宕・江・曾・梗・通の諸攝があるが、このなかで「入声」の韻母を含むのは、咸攝以下の9攝である。しかしこれら9攝のなかでも、上掲のような漢字が含まれる攝は限られており、それは宕攝以下の5攝（すなわち、宕・江・曾・梗・通）である。いま上掲の漢字について、それぞれが所属する攝の名称を示すならば、「北」「黒」が曾攝、「麦」「宅」が梗攝、「六」「熟」が通攝、「鑿」「芍」が宕攝、「剝」「学」が江攝、ということになる。本稿でこれから論述の対象にしようとするのは、このような「入声」の漢字のうち、宕攝と江攝所属のものである。

* 日・中・露語教室 (Dept. of Japanese, Chinese and Russian)

さて、この宕摂と江摂（以下、とくに区別する必要がない限り、この二摂を一括して「宕江摂」と称することにする。中古音以後、両者は区別がなくなって一類となった）に所属する入声の漢字とその現代北京語の発音とを、とくに文語音と口語音とにわけて対比してみると、あるひとつのたいへん特徴的な面白い現象に気づくのである。つまり、どの漢字に対しても文語音・口語音の二音が整然と対応しているわけではなく、なかには文語音だけが具わっていて口語音が存在しないという場合もすくなくないが、もし、漢字を中古中国語の「五音」の枠によって分類し、それぞれの種類ごとに現代北京音の対応のしかたを観察するならば、大別して二通りの状態があるということで、それは、ひとつは、文語・口語の両音が規則的に対応しているというものであり、他のひとつは、文語・口語両音のうち（一方の発音が規則的に欠けているので）原則として一種類の発音しか対応しないというものである。例をあげるならば、宕摂の「酌」「綽」「着」「芍」などは前者の状態を示し、江摂の「桌」「捉」「戳」「朔」などは後者の傾向をみせる。

同じ摂に属し、同じ入声の漢字でありながら、いかなる理由によって上記のような音韻対応の差異が生じたのであろうか。またそれは、中国語のいかなる音韻史的現象を反映しているのであろうか。本稿は、これらの問題について、いささかの考察を試みようとするものである。

§2. 宕江摂入声韻母の音韻変化

さて中古中国語の宕江摂は、そのなかに入声の韻として三つの韻を含んでいる。それらは、「鐸」「覺」「藥」の3韻である（『広韻』韻目による）⁴⁾。

いまこれら三韻に所属する漢字の現代北京音を調べてみると、同一の漢字の発音として、しばしば二種類の形が行われている。ひとつは、韻母が、-ao, -iao となるものであり、ひとつは、韻母が、-e, -o, -uo, -üe となるものである。若干の例をあげるとつぎのとうりである。

「落」 (鐸韻)	lào	luò	「鶴」 (鐸韻)	háo	hè
「剝」 (覺韻)	bāo	bō	「学」 (覺韻)	xiáo	xué
「爵」 (藥韻)	jiáo	jué	「藥」 (藥韻)	yào	yuè

もし同一の漢字にこのような発音のペアが存在するとき、現行の字典・辞典は、一般に、前者の形をとるものを「口語音」（あるいは「白話音」）とし、後者の形をとるものを「文語音」（あるいは「読書音」）と記している。要するに、その漢字、あるいはその漢字を含む語彙の意味・用法が口語に属するか文語に属するかによって、上述のような発音の区別が行われるというわけである。

それでは何故、同一方言のなかに、互いに異なる発音が、同一の漢字の発音として、このように系統的、組織的にならび行われているのであろうか。中古中国語の発音では、それらの漢字には区別がなかったはずである。これについては、平山久雄氏が「中古入声と北京語声調の対応通則」（日本中国学会報、第十二集、1960）において示された所説にしたがって、つぎのように考える。すなわち、——北京語口語音の基礎をなす方言を〈A方

言〉とし、北京語文語音の基礎をなす別の方言を〈B 方言〉とすると、中古中国語の段階では、両方言とも発音は同一であったが、その後互いにことなる変化をたどったために、両方言で別々のよみかたが成立することになった。ところがある時期に、〈B 方言〉が政治的・文化的に優位な方言として〈A 方言〉のなかに入ってきたために、その強い影響の結果として、両方言の互いにことなる発音が、いわば口語音・文語音というかたちで、ひとつの方言のなかで共存することになったのである——と。

それでは〈A・B〉両方言において別々におこった発音の変化とはどのようなものであったのか、つぎにはその変化の過程について、筆者の想定するものを示そうと思う。下に例として掲げた漢字は、鐸韻と覺韻からのもの二つずつで、ひとつは唇音のもの、ひとつは牙音のものである。漢字の中古音形(*印を附したものは平山氏の再構成音にしたがう⁹⁾。

まず〈A 方言〉の場合:

「摸」 (鐸韻)	*mak > mawk > mau (māo)
「閣」 (鐸韻)	*kak > kawk > kau (gǎo)
「剝」 (覺韻)	*pawk > pau > pau (bāo)
「角」 (覺韻)	*kawk > kiawk > kiau > kiau > tçiau (jiǎo)

この方言における変化の特徴は、入声韻尾が *-k > -wk > -u, *-wk > -u というように、一種の母音に転じた (あるいは、-k にかわって -u がその位置を占めた) ということであろう。この変化の結果、宕江攝入声字は、本来入声を含まない攝である効攝の漢字と同音節となり、発音上互いに区別されなくなる。

「烙」 (鐸韻・来母) lào	:	「滂」 (号韻・来母) lào
「鶴」 (鐸韻・匣母) háo	:	「豪」 (豪韻・匣母) háo
「角」 (覺韻・見母) jiǎo	:	「絞」 (巧韻・見母) jiǎo
「学」 (覺韻・匣母) xiáo	:	「肴」 (肴韻・匣母) xiáo

なお、この方言のもうひとつの特徴は、韻尾が u にかわっても、主母音そのものはかわらないで中古の /a/ の状態を保っているということである。この点、韻尾も主母音も変化していった〈B 方言〉と大いにことなるところである。

つぎに〈B 方言〉の場合:

「博」 (鐸韻)	*pak > paʔ > pɔ > pɔ (bó)
「各」 (鐸韻)	*kak > kaʔ > kɔ > kɔ > kə (gè)
「剝」 (覺韻)	*pawk > pak > paʔ > pɔ > pɔ (bō)
「覺」 (覺韻)	*kawk > kiawk > kiak > kiaʔ > kio > kio > küə > tçüə (jué)

この方言では、入声韻尾は、まず -wk, -k が合流して一類となり、ついで -k > ʔ となればしばらくその声門閉鎖音の段階にとどまり、やがて消失へとむかったものと考えられる⁹⁾。この変化の結果、宕江攝入声字は、中古においてやはり入声を含まない攝である果攝所属字と共通の韻母グループを形成することになる。

「鑿」 (鐸韻・従母)	zuò	:	「座」 (過韻・従母)	zuò
「各」 (鐸韻・見母)	gè	:	「個」 (箇韻・見母)	gè
「剝」 (覺韻・幫母)	bō	:	「波」 (戈韻・幫母)	bō
「謔」 (藥韻・曉母)	xuè	:	「靴」 (戈韻・曉母)	xuē

ところで、この方言では、韻尾が変化（あるいは弱化）するとともに、主母音にも変化がおこった。実は、これと同一の変化現象は、-p・-t の韻尾をもつものにも見出されるのである。すなわち：

「各」 (宕攝, 鐸韻)	*kak > kaʔ > ko > kə (gè)
「鴿」 (咸攝, 合韻)	*kap > kaʔ > ko > kə (gē)
「割」 (山攝, 曷韻)	*kat > kaʔ > ko > kə (gē)

筆者は、この〈B 方言〉においては、中古音での主母音が同一である場合、それにつづく韻尾 -k および韻尾 -p・-t の弱化は、上に示したような順序で、互いにあまり時をへだてることなくほとんど同時的に行われたのではないかと考える。

以上のように、宕江攝入声字は〈A・B〉両方言で別々の方向に変化した。ひとつは、入声韻尾を失ってそのかわりに -u 韻尾を現わす方向（すなわち〈A 方言〉の場合）⁷⁾ であり、ひとつは、入声韻尾を完全には失わないで声門閉鎖音のような形で存続させおそくまで入声らしく発音する方向（すなわち〈B 方言〉の場合）である。藤堂明保・上田金次郎両氏は、このような二種類の方言に対して、それぞれ「失入方言」「存入方言」という名称を与えた⁸⁾。

§3. 宕江攝入声字と北京語の発音

この節では、宕江攝入声字を掲げ、それぞれの漢字の北京語の発音を、文語音と口語音とにわけて示すことにする。漢字の例は、中国科学院語言研究所編『方言調査字表』（北京、科学出版社、1964）所載のものを用い、その他とくに必要と思われるものを若干補った。

漢字の配列は、まず 1) 鐸韻のもの、2) 覺韻のもの、3) 藥韻のもの、と三大別してこの順にし、さらに、それぞれの内部を、a) 唇音のもの、b) 舌歯音のもの、c) 牙喉音〈開口〉のもの、d) 牙喉音〈合口〉のものというように、四グループにわけた。ただし、藥韻の舌歯音はすこし複雑で、その現代北京語の発音も二通りにわかれるので、それに応じて二類にわけた。すなわち、「齒頭音」のもの、「舌上音」「正歯音」のものとする。また、「来母」と「泥母」は独立させないで舌歯音のなかに含ませた。ただし藥韻の場合、それらを「齒頭音」の系列に所属させ、「日母」を「舌上音・正歯音」の系列に所属させた。また、韻母に関係する〈開口〉〈合口〉の区別は、宕江攝諸韻の牙喉音だけに存在するもので、江攝の覺韻には存在しない。

なおここで、文語音か口語音かという発音の分類に関して一言しておきたい。つまり、すでに掲げた「落」「剝」「爵」「藥」のように、両方の対応形がきれいにそろっている場合は問題ないが、これに対して、「作」「託」「各」「悪」のように一種類の発音しかもって

いないものもあり (それぞれ, *zuō* または *zuò*, *tuō*, *gè*, *è* と発音される), これらをどう扱うかが問題となる。しかし, 本稿では, 単純に韻母の形だけを基準にして, 原則としてその韻母が *-ao*, *-iao* となっているものを口語音, そうでないものをすべて文語音として分類した⁹⁾。いまあえてこのようにするのは, 本稿でのちに論じる主要な課題が, 口語音, すなわち韻母が *-ao*, *-iao* となっている発音の分布に関することだからである。

さて, 本稿の論述の対象がいまのべたように口語音にあるとすれば, その系統の発音はできるだけ多数収集しなければならない。ところが方言の範囲を北京語だけに限ったのでは, 必ずしも十分には集まらないのである。それで北京語以外のもので, しかし北京語とはたいへん親近な関係にある方言の例を補うことにする。そのような方言としては, 熱河方言と昌黎方言がある。両方言とも, 北京語ではすでにすたれてしまったと思われる口語音系統の発音をわりあいよく保存しているので, その音韻資料としての価値はたいへん高いといわなければならない。

熱河方言の資料としては, Joseph Mullie “The Structural Principles of the Chinese Language, An introduction to the Spoken Language (Northern Pekingese Dialect)” Peiping 1932 を, 昌黎方言については, 河北省昌黎県志編纂委員会・中国科学院語言研究会合編『昌黎方言誌』(科学出版社, 1960) を参照した。以下の表では, これらの方言からの発音は, たとえば, 「擱」(熱河 *kaó*⁴⁾, 「確」(昌黎 *tɕ'iau* 去声) というように示される¹⁰⁾。

以下, 鐸韻, 覺韻, 藥韻の順に発音の対比を行っていく。さらに必要と思われる説明は, それぞれの対比のうしろにつけ加える。

I. 鐸韻 (中古音は, 開口 /ak/, 合口 /uak/)

(a) 唇音

博	<i>bó</i>	—	莫	<i>mò</i>	—
泊(灤)	<i>pō</i>	—	膜	<i>mó</i>	—
薄	<i>bó</i>	<i>báo</i>	幕	<i>mù</i>	—
泊	<i>bó</i>	—	寞	<i>mò</i>	—
箔	<i>bó</i>	<i>báo</i>	摸	<i>mō</i>	<i>māo</i>

「幕」の発音 *mù* は, 遇攝暮韻 (去声) の「暮」「慕」など (いずれも *mù*) に類推した形であろう。「摸」の発音は, 北京語では *mō*, *māo* 両方あるうち前者の形がふつうであるが, 熱河方言では後者, すなわち *mao*¹ のほうがよく行われる (その他 *ma*¹ という音もある)。

(b) 舌齒音

託	<i>tuō</i>	—	鐸	<i>duó</i>	—
托	<i>tuō</i>	—	踱	<i>duò</i>	—
魄	<i>tuò</i>	(熱河 <i>t'ao</i> ⁴)	諾	<i>nuò</i>	—
洛	<i>luò</i>	<i>lào</i>	作 ¹¹⁾	<i>zuō</i> , <i>zuò</i>	—

樂	luò	lào	錯	cuò	—
絡	luò	lào	鑿	zuò	záo
落	luò	lào, là	昨	zuó	—
烙	luò	lào	柞	zuò	—
駱	luò	—	索	suǒ	—
酪	luò	lào			

「落」から「酪」までの来母字に関しては、文語音・口語音の対応がたいへん明瞭であるが、それ以外のところでは口語音の現われかたが不規則的、散発的で、「魄」の熱河方言音 t'ao⁴ と「鑿」の北京音 záo が見出されるだけである。「魄」は「落魄」という単語の一部をなすもので、この単語は、北京語では luòtuò であるが、熱河方言では lao⁴-t'ao⁴ と発音されるという (Mullie 前掲書 Vol. I, p. 272)。

なお上掲の漢字のうち、とくに「作」「錯」など齒音系統のものは、遇撰暮韻 (去声) とたいへん親近な関係がある。その関係は下に示したごとくで、両者の間には声符を共通にするものが目立って多いのである:

鐸 韻	作 zuō, zuò	錯 cuò	昨 zuó, 柞 zuò
暮 韻	作 zuò	錯措厝 cuò, 醋 cù	祚昨仄 zuò

鐸韻の舌齒音系の漢字に口語音の発音が多数欠けているのには、いくつかの理由があるであろうが、その第一の理由としては、上表にみられるような暮韻との関係があると思う。つまり、暮韻の漢字は鐸韻とちがって、文語音・口語音といった発音の区別はなく、はじめから -u ないし -uo という一種類の発音しかもっていない。したがって、もし声符を媒介としてのそれへの類推ないし混同がさかんに行われるならば、それだけ鐸韻字としては、文語系の発音である -uo 形が優勢になり、その反対に、口語系の発音は劣勢になって用いられなくなってしまうということになると思われる。

また「昨」に口語音が欠けている理由としては、つぎのような事情が考えられる。すなわち、この漢字は「昨天」などという単語の一部として現代北京語では常用されているが、昌黎方言ではこの単語は行われず、ふつうはこれとは別の「夜里」という単語を用いる。それで、もし〈A 方言〉においてもかつては今日の昌黎方言と同様であったと仮定すると、現在の「昨天」という単語は〈A 方言〉本来の単語ではなくて、これはあとから〈B 方言〉からはいつてきたものだとして解釈することもできよう。このように考えると、「昨」に口語音の発音が存在しないのは、それほど意外なことではなくなる。ちなみに熱河方言では、「きのう」という意味の単語は、文語では「昨天」であるが、口語では「昨兒個」「夜來個」(「夜落個」) というのを用いる。

(c) 牙喉音〈開口〉

各	gè	—	鰐	è	ào
閣	gé	gǎo	郝	hè	hǎo

攔	gē	(熱河 kao ¹)	貉	hé	háo
脛	gē	(gā)	鶴	hè	háo
鄂	è	ào	惡	ě, è	(熱河 nao ³)

上掲の漢字に関しては、文語音 -e, 口語音 -ao という対応がわりあい整然としている。「各」が -ao の発音をもたないのがむしろ珍しいほどである。「鰐」の口語音 ào は、権寧世編『華語大辞典』(大阪屋号書店, 昭和8年)による。

なお、「脛」には gē の他に、きわめて口語的な gā という発音もある。この発音が <A・B> 両方言のうちのどちらの系列のものか未詳であるが、口語的という性格から判断して、いちおう <A 方言> の系列に入れておく。前出の「摸」の mā, 「落」の là もこれと同系の発音だと考えられる。

(d) 牙喉音 <合口>

郭	guō, guǒ	—	藪	huò	—
廓	kuò	—	穫	huò	—
括	kuò	—	鑊	huò	—
霍	huò	—			

上掲の漢字は、さきの牙喉音 <開口> の場合とちがって、一見して判るように、一種類の発音しかもっていない。すなわち、韻母が -uo となっているものだけであって、-ao となるものはひとつも見出されない。この点が、他の鐸韻字にはみられない、この漢字グループだけにそなわっている顕著な特色である。

II. 覺韻 (中古音は, /awk/)

(a) 唇音

剝	bō	bāo	樸	pǔ	—
駁	bó	—	雹	bó	báo

上掲の漢字は、原則的に、文語音 -o, 口語音 -ao と対応する。「樸」が pǔ となるところが他とことなるが、これはおそらく通撰屋韻の「撲」pū, 「僕」pú などに類推した形であろう。

(b) 舌齒音

桌	zhuō	—	濁	zhuó	—
卓	zhuō	—	濯	zhuó	—
琢	zhuó	—	捉	zhuō	—
啄	zhuó	—	齧	chuò	—
涿	zhuō	—	鑷	zhuó	—
戮	chuō	—	朔	shuò	—

中古音の声母の分類では、「桌」から「濯」までが舌上音、「捉」から「朔」までが正歯音となっていて互いに区別される。しかし中古音以後、両者は合流し、現代北京語にあるような捲舌音声母に一本化された。さてこの声母グループに所属する漢字も、さきの鐸韻

牙喉音〈合口〉の場合と共通し、韻母に *-uo* をもつものがあるだけで、*-ao* 形をもつ例はほとんど見出されない。とくにこれだけの漢字が、歩調をそろえて *-uo* という発音一種類しかもたないというのは、やはりなにか特別の理由があると考えざるをえない。

(c) 牙喉音

覚	jué	jiǎo, jiào ¹²⁾	岳	yuè	(昌黎 iau 去声)
角	jué	jiǎo	楽	yuè	yào
確	què	(昌黎 tç'iau 去声)	学	xué	xiáo
推	què	—	握	wò	—
殼	què, ké	qiào	偃	wù	(熱河 yao ⁴)
嶽	yuè	(昌黎 iau 去声)			

以上の漢字についても、昌黎・熱河両方言の発音を含めて全体的にながめると、文語音 *-üe*、口語音 *-ao* と対応する様相がはっきりと認められる。Mullie によれば、熱河方言に「齷齪」(発音は *wu⁴-suo*) という単語があり、またいっぽう、これと同じ意味をもつ「偃促」という単語もあり、その発音が *yao⁴-ts'u* であるという (Mullie 前掲書 Vol. II p. 235)。上表で「偃」の口語音として掲げた発音は、これによったものである。

III. 葉韻 (中古音は、開口 /iak/, 合口 /iuak/)

(a) 唇音

縛	fú, fó	—
---	--------	---

上掲の漢字「縛」の北京音はふつう *fú, fó* であるが (辞典によっては *fù, fò* という発音も記載している)、権寧世編の前掲の辞典によれば、この外に俗音として *fóu* という音も存在する。ところで、この *fóu* という音はたいへん注目を要するものである。もし中古音からの規則的な変化過程をたどるならば、「縛」は〈A 方言〉では *fáo*、〈B 方言〉では *fó* あるいは *fú* となるはずである。そのどちらの経路をとっても *fóu* という音は成立しにくい。しかしながら、筆者は、この発音は本来〈A 方言〉系統のもので、かつては /fau/ であったのが、のちに /fau/ > /fəu/ と変化してできた音ではないかと推測している。なおこの発音の成立に関しては、第五節においても再述することになる。

(b) 舌歯音〈齒頭音系〉

略	lüè	liào	鵲	què	qiào
掠	lüè	liào	嚼	jué	jiáo
爵	jué	jiáo	削	xuē	xiāo
雀	què	qiào, qiāo			

(c) 舌歯音〈舌上音・正齒音系〉

着	zhuó	zháo	芍	shuó	sháo
酌	zhuó	zhào	若	ruò	(熱河 jao ⁴)
綽	chuō, chuò	chāo	弱	ruò	(熱河 jao ⁴)
勺	shuó	sháo			

葉韻の舌齒音は、便宜上、齒頭音系のものと舌上音・正齒音系のものとに二分したが、そのどちらの系列においても、文語音・口語音という二種の発音が整然とした対応をみせている。すなわち、前者においては、文語音 -üe : 口語音 -ao, 後者においては、文語音 -uo : 口語音 -ao という対をかたちづいているのである。

日母の漢字「若」「弱」は北京語ではともに ruò であるが、熱河方言では jao⁴ である。たとえば、「倘若」「軟弱」はそれぞれ t'ang³-jao, juan³-jao と発音される。なお昌黎方言も熱河方言と同様、これらの漢字は -ao 形をもっている。

(d) 牙喉音 <開口>

脚	jué	jiǎo	約	yuē	yāo
卻	què	(熱河 ch'iao ⁴)	葉	yuè	yào
虐	nüè	—	鑰	yuè	yào
瘡	nüè	yào	躍	yuè	yào

上掲の漢字の場合も、ほとんどが系統的に文語音 -üe, 口語音 -iao という対応をなしている。

(e) 牙喉音 <合口>

鑿	jué, guò	—	鑿	yuè	—
攫	jué, guò	—			

上掲三字の発音は、現行の多くの字典・辞典によれば、それぞれ jué, jué, yuè となっているが、一部の辞典は、この他に -uo という発音もあることを示している。たとえば、井上翠『井上ポケット支那語辞典』(文求堂, 1944) によれば、「鑿」「攫」には ch'üeh⁴ という発音のほかに kuo⁴ という発音も掲げられているし、また C. Goodrich の “A Pocket Dictionary (Chinese-English) and Pekingese Syllabary (Shanghai, 1923) も「攫」に対し、kuo⁴, huo⁴ という発音を記載している。要するに、ここでは、「鑿」「攫」などの漢字に、韻母が -üe となるものと -uo となるものの二種類あるということが注目される、ということである。ただし、これらはいずれも文語音系統の発音であると考えられる。これに対し、口語音系統の発音は見出されない。

以上で、中古宕江撰入声字に関する、北京語の二種の発音の対比をおえる。

§4. 北京語口語音の分布の特色と /uau/ という韻母

前節においては、宕江撰入声字を 12 のグループにわけ、その各々について、北京語の音韻対応の実際を詳細にみてきた。以下の諸項は、それを整理し要約したものである。

- (1) 文語音 -o : 口語音 -ao と対応するもの (鐸韻唇音, 覺韻唇音)¹³⁾
- (2) 文語音 -e : 口語音 -ao と対応するもの (鐸韻牙喉音 <開口>)
- (3) 文語音 -uo : 口語音 -ao と対応するもの (鐸韻舌齒音, 葉韻舌齒音 <舌上音・正齒音系>)
- (4) 文語音 -üe : 口語音 -ao と対応するもの (覺韻牙喉音, 葉韻舌齒音 <齒頭音系>, 葉韻牙喉音 <開口>)

(5) 発音が -uo ないし -üe の一種類しかなくて、上記 (1)～(4) のいずれにも属さないもの (鐸韻牙喉音〈合口〉, 覺韻舌齒音, 藥韻牙喉音〈合口〉)

以上のことがらをさらに整理すれば、(イ) 比較的多くの漢字グループは、文語音・口語音の音韻対応を原則的に保っているが、少数の漢字グループはそのような対応をもっていない。(ロ) 両者の音韻対応のありかたをことならせているのは、口語系の発音である -ao, -iao 形をもつかもたないかであり、(1)～(4) の漢字グループはその発音をもつが、(5) の漢字グループはその発音をもっていない、ということになる。

それでは何故、上記 (5) の3つの漢字グループだけが、とくに他とことなって -ao, -iao 形をもたないのであろうか。このことを問題にするにあたり、こんどは、同じ宕江攝の非入声、すなわち平・上・去声の漢字の発音にも目をむけてみようと思う。つぎに掲げる表は、左側に非入声の漢字の発音を、右側に入声の漢字の発音のうち口語音の発音をならべて示したものである。漢字は、前節と同様、唇音のもの、舌齒音のもの、牙喉音のものというようにわけて、それぞれの種類のなかから二字ずつ選んで掲げた。口語音の発音 (-ao, -iao 形) が存在しないところは空欄にしてある。

I. 唐韻と鐸韻の対比 (平声の韻目によって他の上・去声をかねる。以下も同じ。)

唇音	傍 (並母)	bàng	薄 (並母)	báo
	忙 (明母)	máng	摸 (明母)	māo
舌齒音	藏 (從母)	zàng	鑿 (從母)	záo
	郎 (來母)	láng	落 (來母)	lào
牙喉音〈開〉	岡 (見母)	gāng	閣 (見母)	gǎo
	行 (匣母)	háng	鶴 (匣母)	háo
牙喉音〈合〉	光 (見母)	guāng	—	—
	荒 (曉母)	huāng	—	—

II. 江韻と覺韻の対比

唇音	邦 (幫母)	bāng	剝 (幫母)	bāo
	棒 (並母)	bàng	雹 (並母)	báo
舌齒音	窗 (初母)	chuāng	—	—
	雙 (生母)	shuāng	—	—
牙喉音	江 (見母)	jiāng	角 (見母)	jiǎo
	降 (匣母)	xiáng	学 (匣母)	xiáo

III. 陽韻と藥韻の対比

唇音	房 (奉母)	fáng	縛 (奉母)	(fóu)
	亡 (微母)	wáng	—	—
舌齒音〈齒頭〉	將 (精母)	jiāng	爵 (精母)	jiáo
	相 (心母)	xiāng	削 (心母)	xiào

舌齒音 <舌上 正齒>	昌 (昌母)	chāng	綽 (昌母)	chāo
	尚 (禪母)	shàng	芍 (禪母)	sháo
牙喉音 <開口>	姜 (見母)	jiāng	脚 (見母)	jiǎo
	央 (影母)	yāng	約 (影母)	yāo
牙喉音 <合口>	逛 (見母)	guàng	—	—
	王 (喻母)	wáng	—	—

以上の対応表から知られることは、非入声と入声との間のいずれの対をとってみても、一方が -ang であれば他方は -ao, 一方が -iang であれば他方は -iao という平行関係になっていて、両者は、ただ韻尾をことにするだけで、他の部分は主母音も介音 (-i-) もみな同じになっているということである。ところが、これに対し、非入声が -uang となっているところだけは、入声側は -ao, -iao のいずれも対応するものがなく、その部分は規則的に空欄になっている。この空欄は、他の個所での整然とした一対一の平行関係と比べてみると、たいへん不均衡に感じられるものである。言語の体系性という面からみても、元来そこになんらかの韻母が存在したのではないかと考えざるをえない。そこで筆者は、その空欄をうずめるものとして、/uau/ という韻母を想定するわけである。そうすれば、上掲表のそれぞれの音韻対応はつぎのように整理されて、全体としてたいへん均斉のとれたまとまりのある体系をなすことがわかるのである：

非入声	/aŋ/	/iaŋ/	/uaŋ/
入声	/au/	/iau/	/uau/

韻母 /aŋ/ と /uaŋ/ は互いに <開・合> の対立をなすものであるが、入声の /au/ の場合も、同じように、/au/, /uau/ という <開・合> の対立があると考えられよう。

ところで、この /uau/ という韻母はたいへん奇妙な韻母である。このような形の韻母は、現代北京語はもちろん、他の中国語諸方言のなかにもほとんど見出されないものである。また中古中国語においても存在しなかった。しかし、長い中国語の歴史のなかで一度も存在したことがないかという、そうではない。元・明代の北方中国語のなかでそのような韻母が実際に行われていたであろうということを推測させるいくつかの音韻資料が存在するのである。その代表資料として『蒙古字韻』(1308) があり『中原音韻』(1324) がある¹⁴⁾。そこで以下においては、主として『中原音韻』にもとづいて、この /uau/ という韻母について考察してみることにする¹⁵⁾。

さて中古宕江攝入声字は、『中原音韻』では二つの韻に重出する。ひとつは「歌戈韻」という韻であり、ひとつは「蕭豪韻」という韻である。若干の例を示すと¹⁶⁾：

「闊」	/ko/	/kau/	「薄」	/po/	/pau/
「鶴」	/xo/	/xau/	「落」	/lo/	/lau/
「略」	/lio/	/liau/	「着」	/tʃio/	/tʃiau/

上掲のそれぞれの音韻対応のうち、左側の /-o/ /-io/ という韻母をもつのが「歌戈韻」であり、右側の /-au/ /-iau/ という韻母をもつのが「蕭豪韻」である。ところで、同一の漢

字がこのように二つの韻にまたがって所属しているということは、当時その漢字が実際に二通りの発音をもっていたことをあらわしているものと考えられる。とすれば、このような状況は、現代北京語とまったく軌を一にするものに外ならない。しかしながら、現代北京語の場合は、この種の発音の区別は、一方が文語音で他方が口語音というものであったが、『中原音韻』においてもこれと同様の区別であったのかどうかは、かならずしも明らかではない¹⁷⁾。

さて問題の /au/ という韻母は「蕭豪韻」に含まれている。そこでつぎには、中古中国語の鐸韻と覺韻の漢字を例にとり、中古音と「蕭豪韻」の韻母とを比較し、両者がどう対応するかをみてみよう。まず鐸韻の場合、一般には、中古音 /ak/ : 中原音韻 /au/ と対応する:

「博」(唇音)	中古音 /pak/	中原音韻 /pau/
「託」(舌齒音)	" /tak/	" /tau/
「各」(牙喉音 <開>)	" /kək/	" /kau/

これに対し、牙喉音 <合口> は、中古音 /uak/ : 中原音韻 /uau/ と対応すると考えられる。つまり、中古の牙喉音 <合口> と牙喉音 <開口> とは、『中原音韻』においても依然区別され、そのちがいは介音 -u- の有無にあると考えられるから、前者の漢字は当然 /uau/ という韻母をもつはずである¹⁸⁾。

「郭」(牙喉音 <合>)	中古音 /kuak/	中原音韻 /kuau/
「鑊」(")	" /xuak/	" /xuau/

つぎに覺韻の場合はやや複雑で、まず唇音と牙喉音では、中古音 /awk/ : 中原音韻 /au/, /iau/ (前者は唇音の場合、後者は牙喉音の場合) と対応する:

「剝」(唇音)	中古音 /pawk/	中原音韻 /pau/
「角」(牙喉音)	" /kawk/	" /kiau/

これに対し、舌齒音は、中古音 /awk/ : 中原音韻 /uau/ と対応すると考えられる。ただし、ここに登場する /uau/ という韻母については、いささか説明を必要とする。

すでに知られているように、中古江韻 (中古音 /awŋ/) の舌齒音は、中古音以後舌上音・正齒音の区別を失い捲舌音声母一本に統合されたが、いっぽうでは、その声母のうしろに u 介音を生じさせるという特異な音韻変化をひきおこした¹⁹⁾。この変化の結果、江韻はその舌齒音の部分だけが、特別に開口韻母から合口韻母へ転じることになったのである²⁰⁾。ところで、ここで注意しなければならないのは、この捲舌音声母のもとの u 介音の生起という現象が、非入声の側だけでおこったのではなく、入声の側でも同じようにおこっていたであろう、ということである。すなわち、つぎのごとくである:

「窗」	*t'awŋ > tʂ'awŋ > tʂ'uawŋ > tʂ'uaŋ
「雙」	*ʂawŋ > ʂawŋ > ʂuawŋ > ʂuaŋ
「戮」	*t'awk > tʂ'awk > tʂ'uawk > tʂua
「朔」	*ʂawk > ʂawk > ʂuawk > ʂua

一般的にいて、中国語の音韻変化というのは、入声と非入声 (平・上・去声) との間

で平行して行われるのがふつうである。声母ないし主母音の変化はもちろん、介音の出現・消失に関しても、非入声の側で行われることは同時に入声の側でも行われるというのは、きわめて規則的である。この規則性ということについては、江攝の舌歯音の場合も例外ではないと考えられる。それで筆者は、前掲の「窗」「雙」「戮」「朔」に対しても、入声・非入声の別に関係なく、両方に同じような合口化の過程を推測するわけである²¹⁾。ただし、合口化以後の変化の状況は互いにすこしことになっており、前者（「窗」「雙」）においては韻尾が /-wŋ/ > /-ŋ/ へとうつっていったのに対し、後者（「戮」「朔」）においては韻尾が /-wk/ > /-u/ と母音化していったのである。なお、「桌」「戮」「朔」などの覚韻舌歯音字が合口的介音を含んでいるという状況は、べつに『中原音韻』だけに想定されるものではない。ほぼ同時代に成った『古今韻会举要』（1297）や『蒙古字韻』などにおいても同様にうかがい知ることのできるものである²²⁾。

以上、鐸韻と覚韻の漢字を中心にして、中古音と『中原音韻』の「蕭豪韻」との音韻的対応関係をみてきた（葉韻については、鐸韻に準じて考えることができる）。その結果、「蕭豪韻」の /uau/ という韻母は、中古の鐸韻牙喉音〈合口〉および覚韻舌歯音という特定の漢字グループに関係する韻母であることがわかった²³⁾。ところが、これらの漢字グループというのは、実は、さきに中古音と現代北京語口語音との対比を行ったさい見出した、-ao・-iao 形を規則的にもっていない漢字グループと同一のものである。ということは、『中原音韻』と現代北京語口語音とを対比した場合、前者において /uau/ となっているところは、後者ではその発音は存在せず、その部分はいわば空欄になっている、ということに外ならない。そこで筆者は、現代北京語口語音の祖先である〈A 方言〉においても『中原音韻』と同様、/uau/ という韻母があって、それが音韻変化で -uau > -uo となったために、ちょうどその韻母が具わっていた部分が空欄になったのだと解釈するわけである。こうして本来 /uau/ であったものが、-uo（文語系）の方向に合流してしまったために、結局、その部分に関しては、少くとも韻母のうえからは、文語音か口語音かの区別がつけられなくなってしまったのである。参考までに、-uau > -uo となる、その変化の過程を示すならば：

「郭」 kuau > kuɔu > kuɔ > kuo (guō)
 「朔」 ɕuau > ɕuɔu > ɕuɔ > ɕuo (shuò)

であると考えられる。uɔu > uɔ となるさい韻尾の u がおちたのは、介音と韻尾との異化作用によるものと説明される。

ここで附言すれば、-wŋ・-wk という唇音化された韻尾をもつ韻母に u 介音が発生するというのは不自然だという考えがあるかもしれない。たしかに、中古効攝系の「爪」「抄」「梢」などは韻尾に -u をもち、その声母も捲舌音であるが、*tɕau > tɕuɔu, *ɕau > ɕuɔu というようには変化していない。しかしながら、同じ唇の調音をともなり韻尾といっても、-u と -wŋ・-wk とはかなり性格がことなる。前者は円唇母音で、実際の発音では [o] ないし [ɔ] になることのあるのに対し、後者は、平山久雄氏によれば、/-u/+/-ŋ, -k/ と結合した複合的韻尾ではなく、それだけで単一の音素とみなされる一種の子音である。筆者の

考えによれば、この韻尾は、どちらかというところと $-m \cdot -p$ に近いものではないかということである²⁴⁾。このような韻尾は、実は、 u 介音を生じさせないどころか、かえって、その出現に力のかしたとも考えられる。中国語の歴史のなかで、韻尾 $-m \cdot -p$ をもっていたものが、 $-m > -n$, $-p > -ʔ$ と変化する過程で、その唇音要素を介音に附着させ、その韻母を合口化したという例が、個別的ではあるがときどき見受けられるのである。たとえば、「入」 $*niep > zu$ (rù), 「尋」 $*siem > süən$ (xún), 「淋」 $*liem > lüən$ (lün, なお「淋」には当然 lín という発音もある)。なお、これらの例とその合口化の説明は、平山氏の所説によったものである(「北京語における清入声舒声化の条件について(上)」中国語学 114, 1961)。

以上の合口化に関連するもうひとつの例をあげれば、中古通撰屋韻所属で捲舌音声母をもっていた「縮」は、北方方言で $-uaŋ$ と発音されることがある。たとえば、洛陽方言 *shuang*, 崇礼・尚義方言 $/suaŋ/$ (*swä*) である²⁵⁾。この発音は中古音からつぎのように変化してできたものと考えられる。すなわち:

「縮」 $*ši\Delta wk > \text{ʃ}ua\Delta wk > \text{ʃ}uawk > \text{ʃ}uau > \text{ʃ}uaŋ$

§5. 『中州音韻』および『等韻図経』における $/uau/$ という韻母

$/uau/$ という韻母が明代においても行われていたことを示す資料として、『重訂司馬温公等韻図経』(徐孝 1606, 以下『等韻図経』と略称する)がある。しかしこれについてのべる前に、さきに『中州音韻』(王文璧, 明正徳年間, 1500 頃)についてみておこうと思う。

『中州音韻』は、音韻的には『中原音韻』とたいへん密接な関係をもつ韻書である。しかし『中原音韻』に比べると、音韻資料としては、これまでほとんど注目されることはなかった。これに関する著作というところ、比較的まとまったものとしては、現在のところ佐々木猛氏の「明・王文璧『中州音韻』の性格」(均社論叢 第四卷第一期 1977)があるにすぎない。そこで、以下は、この佐々木氏論文を参照しつつ、この書の特色と問題点を記していくことにする。

さて『中州音韻』は、明代において中国南方で盛行した南曲のために作られた韻書である。しかし南曲用といっても、そのために特別に新しく作られたというのではなく、あくまでも『中原音韻』を基盤にして、それに増加改訂を加えたもので、基本的には『中原音韻』の体系ほとんどそのままといってよいものである。すなわち、韻母については、『中原音韻』と同じく 19 韻目をたてており、その種類や内容もほとんど同じである。また声母に関しても、中古中国語の濁音声母をのこしている点がことなるが、これを除けば、『中原音韻』とほとんど一致する。

しかしながら、この書は、『中原音韻』と著しくことなる面も持っているのである。それは、各字に簡単な注解が施されているということと、反切を中心とした音注が附されているということである。このうち、音注の部分は、比較的重要なものだと考えられる。何故なら、この音注は、場合によっては、逆に『中原音韻』の音価推定の材料としても利用できるのではないかと思われるからである。そこで、本稿では、この書の音注のうち、と

くに反切に注目し、その特色の一端を述べてみたいと思う。

佐々木氏は、『中州音韻』の反切が非常に明確な原則で作られているとして、その原則として、3つの要点をあげている。その1は、反切上字は平声字を用いるということ、その2は、五音の枠(唇・舌・歯頭・正歯・牙喉)を想定し、反切下字もできるだけ同一枠内の漢字を用いるということである(第3の点は省略)。このうち、第2の点は、反切上字と下字がともに同一系列、同一枠内の声母であるという形式のもので、この書独特の反切の作りかたである。以下に、この形式の反切を数例掲げてみる²⁶⁾：

崩 (p-) = 逋 (p-) 蒙 (m-) 切 灾 (ts-) = 玆 (ts-) 腮 (s-) 切
 噴 (p'-) = 鋪 (p'-) 門 (m-) 切 蘇 (s-) = 僧 (s-) 租 (ts-) 切
 那 (n-) = 農 (n-) 多 (t-) 切 光 (k-) = 姑 (k-) 黄 (h-) 切

ところが、反切のなかには、上記のような形式に従わない例も存在する。すなわち、反切上字と下字がそれぞれ別の枠内の声母に属するというものである。そこで、つぎには、そのような例外的な反切に目をむけることにし、そのなかから、とくに反切下字に唇音字を用いるものを取りあげて考察してみようと思う。まず、反切例を拾い集めて下に列挙する：

- | | |
|-------------------------------|--------------------------------|
| 1) 耍 (s-) = 霜 (s-) 馬 (m-) 切 | 9) 朔 (s-) = 聲 (j-) 卯 (m-) 切 |
| 2) 率 (s-) = 升 (j-) 擺 (p-) 切 | 10) 郭 (k-) = 沽 (k-) 卯 (m-) 切 |
| 3) 困 (k'-) = 匡 (k'-) 門 (m-) 切 | 11) 廓 (k'-) = 枯 (k'-) 卯 (m-) 切 |
| 4) 礦 (k-) = 古 (k-) 猛 (m-) 切 | 12) 讓 (o-) = 於 (o-) 包 (p-) 切 |
| 5) 肩 (k-) = 居 (k-) 名 (m-) 切 | 13) 恣 (t'-) = 他 (t'-) 美 (m-) 切 |
| 6) 濁 (ts-) = 之 (tj-) 麻 (m-) 切 | 14) 則 (ts-) = 滋 (ts-) 美 (m-) 切 |
| 7) 弱 (z-) = 襍 (z-) 播 (p-) 切 | 15) 勒 (l-) = 離 (l-) 妹 (m-) 切 |
| 8) 卓 (ts-) = 之 (tj-) 卯 (m-) 切 | 16) 黑 (h-) = 享 (h-) 美 (m-) 切 |

さて上掲の 1)~12) までの反切を通観してみると、その中からある一応の傾向がうかがい知られるのではないかと思う。その傾向とは、すなわち、反切下字に唇音字を用いることによって一種の「合口」の発音をあらわそうとしているのではないか、ということである。この状況をもうすこし具体的にみてみると、まず 1)~7) に関しては、それらが合口の発音をあらわしているのとみるのは全く問題がない。何故なら、それらの反切母字は、もともと合口であるか、あるいは中古以後に開口から合口に転じたものだからである。しかし、つぎの 8)~12) の場合はすこし問題で、これらも合口の発音をあらわすと考えられるものであるけれども、その理由については若干の説明を要する。まず比較のため、同じ「蕭豪韻」の同じ声母をもつ漢字の反切をいくつか拾い出して、下に示す。これらは、いわば規則的な反切で、上字も下字も同一枠内の声母に属するものである：

- | | |
|--------------------------------|--------------------------------|
| 17) 嘲 (ts-) = 之 (tj-) 梢 (s-) 切 | 20) 考 (k'-) = 康 (k'-) 襖 (o-) 切 |
| 18) 梢 (s-) = 尸 (j-) 嘲 (ts-) 切 | 21) 奥 (o-) = 烏 (o-) 告 (k-) 切 |
| 19) 高 (k-) = 歌 (k-) 豪 (h-) 切 | |

さてこれらの反切と、さきの 8)~12) の反切とを、8) と 17)、9) と 18)、10) と 19)

というように、ひとつずつ対比させてみるならば、一見したところでは、それぞれの反切の対は同一の発音をあらわしているかのようである。しかしながら、これらは、実際には、互いにちがった発音をあらわしていると考えられるものである。筆者の考えによれば、その発音のちがいは反切下字によって示されており、前者はふつうの反切によって /au/ という韻母をあらわすのに対し、後者は、その唇音の反切下字によって、とくに合口の韻母 /uau/ をあらわしていると推測するわけである。

つぎに、13)~16) の反切についてであるが、これらは反切下字が唇音字であるけれども、実際は、開口の発音をあらわすと考えられる。つまり、この場合は、たまたま -ei という韻母をもっている漢字が唇音字にしか存在しなかったので、いわばやむをえない措置としてそれを反切下字に採用したということであろう。

以上、『中州音韻』の反切を取りあげて、そのなかに /uau/ という韻母をあらわすものがあるということを見てきた。それによれば、「卓」「朔」「郭」「廓」などが実はそのような形式の韻母をもつ漢字であるということであった。さらに、ついでに附言するならば、王文璧は、合口音のための反切をつくるにあたり、もし反切下字として使えるような適当な合口字が存在しなければ、そのかわりに唇音字を用いるということ、あるいは原則のひとつとして設定していたのではないか、ということである。以上で『中州音韻』に関する考察をおえ、つづいては『等韻図経』を対象としての考察をすすめていくことにする。

『等韻図経』は明代末期(17世紀初め、明代万暦年間)に著されたもので、当時のある北方官話方言の実際の口頭語の音韻組織を記録したものであるとして、よく知られている。その北方方言とは、北京語そのものではないかもしれないが、それにきわめて近い言語であることは疑いないものである。藤堂明保氏は、その論文「官話の成立過程から見た西儒耳目資」において、北方中国語方言の音韻の歴史を、「中古漢語」→「古官話」(Old Mandarin, または「中世漢語」 Middle Chinese)→「近代官話」(Modern Mandarin) と三段階にわけ、それぞれの段階を代表する音韻資料として、古官話については『中原音韻』、近代官話については『等韻図経』をあげている。このことによっても、同書の中国語音韻史において占める地位の大きさというものが、ある程度うかがい知られるのではないかと思われる。

さて、『等韻図経』に関する研究は、解説的なものも含めて、これまでいくつか報告されているが、そのなかでももっとも重要なのは、陸志韋氏の「記徐孝重訂司馬温公等韻図経」(燕京学報 第32期 1947, また『漢語音韻学論集(第一集)』香港 崇文書店 1971所収)であろう。同論文はまた、『等韻図経』の音韻表全25図が収録されているので、その点においてもたいへん有益なものである。本稿の以下の考察も、大体において、この陸氏論文にもとづいて行われるものである²⁷⁾。

『等韻図経』は、韻母に関しては13撰を設けている。すなわち、通・止・祝・蟹・屋・効・果・仮・拙・臻・山・宕・流の諸撰である。これらはさらに「開口篇」と「合口篇」とにわけられ、それぞれ独立してひとつの図が形成されている。ただし祝撰だけは「独韻篇」となっていて、この〈開・合〉の区別がない。さてこうした原則で作られた音韻図が

全部で 25 図あるわけであるが、そのなかで、本稿のテーマと関係があるものとして注目されるのが、〈効撰第十一合口篇〉である。この図が何故とくに注目されるかという、この図のすぐ前の〈効撰第十開口篇〉が /au/, /iau/ という韻母のための図であるのに対し、この〈効撰第十一合口篇〉が /uau/ という韻母のために設けられた図であるからに外ならない。そこで、まず、煩をいとわず、この〈第十一合口篇〉の図を掲げてみることにする：

『等韻図経』 〈効撰第十一合口篇〉

見	溪	端	透	泥	幫	滂	明	精	清	心	影	曉	來
					非	敷	微	照	穿	稔	審		
○	○	○	○	○	包	胞	瞞	○	○	○	○	○	○
鏗	○	○	○	○	保	翹	卯	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	報	泡	貌	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	電	袍	毛	○	○	○	○	○	○
							鬪	○	○	○			
								○	○	○	○		
								○	○	○	○		
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	缶	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	縛	○	○	○	○	○	○	○	○

さて上の図を通観してすぐ気附くことは、唇音声母「幫」「滂」「明」の下には漢字が整然と配列されているのに、他のところはほとんど空欄になっていて、わずかに「非」(f-)を声母とする「缶」「縛」と、「鏗」「鬪」の計 4 字が存在するにすぎない、ということである。ところで『等韻図経』では、唇音字は一般に開口としてではなく合口として扱われているから、「包」「胞」「卯」などの唇音字がこの〈合口篇〉のなかに入っていることは、なんら問題がない。問題なのは、それ以外の「鏗」「鬪」と「缶」「縛」である。これらの発音は、『等韻図経』においては、前二者がそれぞれ /kuau/, /tʂuau/, 後二者がともに /fau/ であったと推定されるが、このような形は、もちろん現代北京語では行われていないものである。陸志韋氏は前掲論文において、とくに前二者の発音に対しては強い疑問を呈している。それ故、これら 4 字の発音について、それらが実際に存在したものであるかどうか、以下、ひとつずつ検討を加えて確かめてみようと思う。

(1) 「缶」「縛」について

これらの発音はたしかに /fau/ であったと思われる。現代北京語では /f+/au/ という結合は存在しないが、この形は、他の北方方言ではべつにめずらしいものではない。まず

「缶」は、北京語では fǒu であるが、熱河方言では fao と fou の二音が行われている。また淮北方言でもこれを fao と発音するという（劉特如「淮北方音」『方言与普通話集刊』第7本所収）。ちなみに、「否」を /fau/ (fao) と発音する方言はたくさんあって、たとえば、洛陽・平度・莒南・通化などの方言にその例を見出すことができる²⁸⁾。

これに対し、「縛」を /fau/ と発音する方言は、元代の『中原音韻』を除けば、今のところちょっとみつからない。しかし、北京語にその俗音として fǒu という音があり、これが実は /fau/ からきたものではないかという考えはすでにのべたとおりである。つまり、北京語においても、かつて /fau/ という発音が行われていたことがあると、筆者は推測するわけである。ただしこの発音は、「縛」という漢字だけに存在するものであった。ところで、一般に、漢字一字のためだけに存在する孤立した発音というのは、たいへん動揺しやすいと考えられる。とくに「縛」の場合は、一方で文語音の fó や fú も行われているはずであるから、そこからの影響は当然受けるであろう。そして、おそらくはその影響による文語音と口語音との混同、さらには「否」「缶」の発音 (fǒu) への類推ということになるのだと考えられる。

(2) 「鑿」について

この漢字の発音は /kuau/ であると考えられる。陸志韋氏は、この漢字の発音について、“鑿居縛切，變為今音 kiue>tɕye, 在古官話也不能有 kuɔu 的音。凶上一定錯了地位，或是錯字。”とのべているが、筆者は、この発音は実際に存在したとみなすのである。すでにみてきたように、「鑿」「攪」など葉韻牙喉音〈合口〉の漢字は、現代北京語で二通りの発音をもっている。ひとつは韻母が -üe となるものであり、他のひとつは韻母が -uo となるものである。このような状態は、中古音以後の音韻変化がつぎのようにことなっていたための結果だと考えられる。すなわち、前者は、*iuak>-iuak?>-iuo>-üe と i 介音をそのままとどめるような過程をたどったものであり、後者は、逆に *iuak>-uak>-ua?>-uo と i 介音を脱落させる方向に変化したものである。この変化の結果、前者は「脚」や「覺」「角」(の文語音) と同音になったし、後者は「郭」などと同一音韻グループを形成することになったのである²⁹⁾。なお、後者における i 介音の脱落という現象は、同じ撰の非入声側とも軌を一にするものとして注目される。すなわち、「逛」*kiuaŋ>kuaŋ, 「匡」*k'iuaŋ>k'uaŋ。

以上はどちらも〈B 方言〉(文語音系)でおこった変化であるが、同じ変化現象は〈A 方言〉(口語音系)においても平行的におこりえたと考えられる。すなわち、この方言でも i 介音を残存させる方向と i 介音を脱落させる方向の二種の場合があって、このうちの後者の経路をとったのが、『等韻図経』の「鑿」の /kuau/ であると考えられる。すなわち、*kiuak>kuak>kuau。なお、これに関して、橋本萬太郎教授は、“Internal evidence for Ancient Chinese palatal endings”注 39)において、楊福綿氏の報告によるものとして、たいへん興味深い例を提供された。すなわち、河北省東閩方言に [waũ-tsz] という単語があり、これが中古中国語の *jiuak (漢字で示せば「鑿」か) と結びつけられる

のではないかということである。この *jiuak* という中古音形は葉韻牙喉音合口系であるから、そこから変化してうまれたとすれば、この [waũ] という形は、あきらかに〈A 方言〉系統のものである。そして、その変化過程はさきの「鏹」の場合と同じで、**jiuak* > *uak* > *uau* のごとくであったと考えられる。

以上によって、「鏹」の発音 /kuau/ が実際に行われていたものであることが、ますますはっきりしたと思われるのである。

(3) 「鬪」について

この漢字の発音について、陸志韋氏は、“很可能的，這字還是像八思巴音的 *uof*，並不是當時順天方言的音。是從別的方言借來的。”と解説を施しているが、これも「鏹」と同様、/tʂuau/ という発音で実際に行われていたものと考えられる。『中文大辞典』(中国文化研究所 台北 1962-1963)によれば、この漢字は「鬪」と同じもので、発音は「株玉切」と「之角切」の二種類あるということである(これに対応する北京音はそれぞれ *zhú*, *zhuó*)。このうち後者は、中古覚韻系統の発音であり、実は「桌」「琢」「涿」などと同音のものである。とすれば、この漢字も「桌」「琢」と同様、**tʂawk* > *tʂuawk* > *tʂuau* という変化過程をたどったことがあるはずであり、そしてそのように変化した発音がたまたま明代のおわり頃にも行われていたために、『等韻図経』に記録されたのだと考えられる。なお、『蒙古韻略』(兪昌均再構)にも「鬪」という漢字が記載されており、それによればその発音は *tʂoaw* であり、また又音として *tʂju* もあるということである。

以上の検討によって、『等韻図経』の〈効撰第十一合口篇〉が、陸志韋氏が論じているような架空の図なのでは決してなくて、当時口語音として実際に存在し、実際に発音されていたものを記したたいへん特色ある図であるということが明らかになったと思う。ところで、元代においてはさかんに行われていたと考えられるこの /uau/ という韻母は、明代にはいるとしだいに消滅し -uo へ合流する過程をたどることになった。おそらく『等韻図経』は、そうした過程の最終的な段階を伝えているのかもしれない。

注

- 1) 『切韻』(601), 『広韻』(1008) などの韻書に反映された中国語,あるいはその音韻体系をさす。隋唐時代の標準音とみなされる。
- 2) 現代北京語の発音は、原則として拼音ローマ字を用いてあらわす。しかし時には、音韻表記を用いることもある。この場合はふつう / / を附してしめす。
- 3) 中古中国語の子音韻尾としては、従来 /-m, -p/, /-n, -t/, /-ŋ, -k/ の6種が推定されていた。このうち、-p, -t, -k が入声韻尾である。ところが、頼惟勤氏論文「上古中国語の喉音韻尾について」(お茶の水女子大学人文科学紀要, 第3巻, 1953)以後、これ以外にもう一種の韻尾を認めようという考えかたが、わが国を中心に行われている。最近の代表的なものとしては、橋本萬太郎教授の /-ŋ, -c/ 説, 平山久雄氏の /-uŋ, -uk/ (のちに /-wŋ, -wk/) 説がある。前者については:

“Nasal and stop endings in Ancient Chinese” Unicorn (Chi-lin) 5, 1969.

“Internal evidence for Ancient Chinese palatal endings” Language, Vol. 46-2, 1970.

「朝鮮漢字音と中古中国語高口蓋韻尾」アジア・アフリカ言語文化研究 7, 1974.

などの諸論考を、後者については:

「敦煌毛詩音残卷反切の研究(上)」北海道大学文学部紀要 14-3, 1966.

「中古漢語の音韻」『中国文化叢書① 言語』東京、大修館書店、1967.

「敦煌毛詩音殘卷反切の研究 (中の 1)」東京大学東洋文化研究所紀要 78, 1979.

などの諸論文、とくにそのなかの中古音の音韻体系に関する部分を参照されたい。

- 4) 鐸・藥韻が宕攝の韻、覺韻が江攝の韻である。なお、ここで宕・江兩攝の入声韻尾について一言しておく、従来、これらの韻尾は $-k$ 一種であるとされてきた。しかし、これに対して、三根谷徹(「中古漢語の韻母の体系」言語研究 31, 1956)・平山久雄の両氏は、両者の韻尾に区別を認め、宕攝に対しては $-k$ 、江攝に対しては $-uk$ という韻尾を推定された(ただし平山氏は、前掲 1979 年の論文で $-uk$ を $-wk$ に改めた)。したがって、三根谷・平山説によるならば、鐸・藥韻は $-k$ 韻尾をもち、覺韻は $-uk$ (あるいは $-wk$) 韻尾をもつ。
- 5) 平山氏の再構した中古音系については、前掲 1979 年の論文所載の「中古音の音韻体系」(pp. 35-42) の部分を参照。
- 6) <B 方言> で $-k > -?$ と変化したと考えるについては、それを証明する直接の材料があるわけではない。しかし $-k$ がいきなり今日のような韻尾ゼロの発音に変化したとは考えにくいから、その途中の段階として $-?$ (声門閉鎖音) を想定するのは妥当なことであると考えられる。なお、北方方言のなかには、今日でも中古音の入声韻尾に対応するものとして $-?$ を保っているところがたくさんある。「漢語方音的幾個問題」(『方言与普通話叢刊』第 1 本所収、北京、1958) 参照。
- 7) <A 方言> においていつごろ韻尾 $-k$ 、 $-wk$ が $-u$ になったかということは、まだよくわかっていない。しかしこれに関連するものとして、平山久雄氏は、たいへん興味ぶかい实例を提供された(『中原音韻』入派三声の音韻史的背景 東京大学東洋文化研究所『東洋文化』58, 1978)。すなわち、平山氏によると、疑問詞の「怎」という語は「作麼」がつづまってできたもので、その発音は $tsəm$ ^上 (五代・北宋頃) であり、その縮合過程は:
「作」 $tsauk$ 「麼」 mu ^上 → $tsəm$ ^上 mu ^上 → 「怎」 $tsəm$ ^上
であったとする。そして、「作」の中古音は $tsak$ であるが、この縮合過程のはじめの段階ではすでに $tsak > tsauk$ になっていた、という指摘も行っている。以上の推論によれば、宕攝入声字における韻尾の $-k > -wk$ への推移は、すくなくとも五代以前にはさかのぼりうるということになるであろう。
- 8) 藤堂明保「官話の成立過程からみた西儒耳目資」東方学 第 5 輯, 1952, ならびに上田金次郎「中古漢語の入声の変遷と北京語の破音の現象 (一), (二)」中国語学 52・53, 1956 参照。
- 9) 平山久雄氏は、その論文「中古入声と北京語声調の対応通則」において、中古の入声字でその声母が「全清」「次清」のものは、現代北京語において二通りの声調分布をもっているということを示した。その声調分布とは、漢字の用法が口語的か文語的かによってことなるもので、すなわち、口語においては声調は上声と陰平になり、文語においては声調が去声と陽平になるというものである。いまこの解釈によって発音を分類するならば、韻母の形にはあまり関係なく、その声調の形から、たとえば「作」 $zuò$ 、「各」 $gè$ 、「悪」 $è$ 、「昨」 $zuó$ などは文語的、「作」 $zuō$ 、「託」 $tuō$ 、「索」 $suó$ 、「惡」 $ě$ (「悪心」という単語の場合)などは口語的ということになるであろう。そしておそらく、このようなわけかたのほうが、現代北京語の話し手の感覚にも合致しているのではないと思われる。
- 10) Mullie の著書は、内容としてはもっぱら語法を扱ったものであるが、その豊富な用例のもとにはひとつひとつ発音が併記されているので、その発音の部分が音韻資料として利用できるわけである。同書の発音表記は、English romanisation と phonetical romanisation の二種類を併用しているが、本稿で掲げるのは、そのうちの前者の表記によるものである。
- 11) 「作」の中古音形としては、入声(鐸韻)のものとして去声(暮韻)のものとの二種類あるから、 $zuò$ という発音はそのどちら側にも対応しうる。「作」(「做」はこの俗字)にはこの他に $zòu$ という発音もある(倉石武四郎著『岩波中国語辞典』など)。この発音は熱河・昌黎両方言においてもさかに行われているようであるから、北方方言に相当広く分布しているとみられる。ところで、この音形の成立に関しては、いちおうつぎの三通りの過程が考えられる:
(イ) $*tsak > tsau > tsəu > tsou$ (A 方言系)
(ロ) $*tsak > tso > tsuo > tsou$ (B 方言系)
(ハ) $*tsu$ ^上 $> tsu > tsou$ (あるいは $*tsu$ ^上 $> tsu > tsuo > tsou$ か)

(イ) (ロ) は鐸韻字としての変化のしかた, (ハ) は暮韻字としての変化のしかたである. このうち, 実際におこった可能性としては, (ロ) より (ハ) が, また (ハ) より (イ) が大ではないかと考えられる. そこで (イ) のように変化したのだとすると, 「作」にもかつて -ao 形が存在したことがある, というるかもしれない.

- 12) 「覚」は覚韻だけでなく効撰去声の効韻にもみえるから, この *jiào* は, その去声の音に由来する発音とも考えられる.
- 13) 藥韻唇音の漢字「縛」にもかつては /*fau*/ という発音があったのではないかということはずでにのべた. とすれば, この漢字も文語音 -o: 口語音 -ao という音韻対応をもっていたことになり, (1) の漢字グループと同列に扱うことができる.
- 14) 中国語の歴史において, 介音と韻尾に同じ母音要素がならび立つ /*iai*/, /*uau*/ といったタイプの韻母が存在したこと, またそのような韻母に関しておこった異化作用 (*iai* > *ia*, *ie*; *uau* > *uo*) ということに強い関心をもち考察を加えられたのは橋本萬太郎教授である (“Internal evidence for Ancient Chinese palatal endings”).

ところで, 現代方言のなかで /*uau*/ という発音が皆無かという, そうではない. 橋本教授は, そのような発音をするものとして, 上記論文の注の 39 において, 鄭州方言と河北東閩方言の例をあげている. ただし鄭州方言の場合は, 「桌子」*tʂuau*, 「刷子」*ʂuau*, 「襪子」*uau* といった単語において行われるもので, これらは, 実のところ, “-ua+u” (u は名詞接尾語で, 北京語の「子」に相当するもの) の結合によってできたものである (袁家驊等『漢語方言概要』北京 文字改革出版社 1960 39 頁参照).

- 15) 『中原音韻』の音系全般を記述した著書・論文はすくなくないが, そのなかで筆者が主として参照したのは, 以下のものである.

趙蔭棠『中原音韻研究 (重版本)』北京 商務印書館 1956 (初版 1936).

陸志韋「釈中原音韻」燕京學報 第 31 期 1941 (『漢語音韻學論集, 第二集』所収 香港崇文書店 1971).

董同龢「早期官話」『中国語音史』所収 台北 中華文化事業委員會出版部 1954. (のち『漢語音韻學』所収 台北 廣文書局 1968).

劉德智注音, 許世瑛校訂『音注中原音韻』台北 廣文書局 1969.

- 16) 『中原音韻』の推定音は, 筆者自身の考えによって適当と思われるものを示した. 趙蔭棠・董同龢両氏は, 「蕭豪韻」の韻母中に *au*, *au* の二種の韻母を設定しているが, 中古入声に関係する漢字に限っていうならば, この区別はなくてもよく, どちらかひとつで十分だと思う.
- 17) 現代北京語との比較からすれば, 「歌戈韻」の発音は文語系, 「蕭豪韻」の発音は口語系ということになるであろうが, 実際にそのような区別であったかどうかは, 明確に証明されているわけではない.
- 18) 趙蔭棠, 董同龢などの諸氏は, すでに「蕭豪韻」に含まれる韻母のひとつとして /*uau*/ という形式を認めている. しかし, この形式の韻母が推定される漢字の範囲としては, 中古鐸韻牙喉音〈合口〉だけに限られる. なお, 董同龢氏は「蕭豪韻」の韻母として, *au*, *au*, *iau*, (*uau*) の 4 種を掲げているが, このうち *uau* に対しては () を附し, “[*uau*] 這樣的韻母太奇怪了” として疑問をいただいている.
- 19) このような音韻変化が生じたことについて, 橋本教授は, “捲舌音に自然に伴う唇音化 (ロシア語の [ʃ] のようなもの)” によるものだとして説明している (『朝鮮漢字音と中古中国語高口蓋韻尾』, ならびに “Retroflex endings in Ancient Chinese” *Journal of Chinese Linguistics* Vol. 1-2, 1973 参照).
- なお唐末・五代の漢チベット対音資料には江韻舌上音の「轄」に *jwan*, *zwan* という注音が附される例があるので, これによるならば, この *u* 介音発生という現象は, 唐代のおわり頃にはすでにおこりえていたと考えることができる (羅常培『唐五代西北方言』上海 1933 参照).
- 20) 同様の合口化現象は, 陽韻の正歯音 2 等 (歯上音) にもみることができる. 「莊」**tʂian* > *tʂuan* (*zhuāng*), 「創」**tʂ'ian* > *tʂ'uan* (*chuàng*), 「霜」**ʂian* > *ʂuan* (*shuāng*) など.
- 21) 従来の諸研究では, これら「卓」「黠」「朔」に対しては /*tʂau*, *tʂ'au*, *ʂau*/ という開口的韻母を与えているが, これらは /*tʂuau*, *tʂ'uau*, *ʂuau*/ とするのが適当ではないだろうか. ただし, 「爪」「抄」「梢」のように, 中古効撰系のものは /*tʂau*, *tʂ'au*, *ʂau*/ であることにはかわりはな

- い (もっとも「瓜」には /tʃua/ という別の音もあるが).
- 22) 以下の諸論考を参照されたい:
 花登正宏「古今韻会挙要考——韻類について——」山形大学紀要 (人文科学) 第9巻第1号 1978.
 服部四郎『元朝秘史の蒙古語を表はす漢字の研究』東京 竜文書局 1946
 Nakano, Miyoko "A Phonological Study in the 'Phags-pa Script and the Meng-ku Tzu-yün" Canberra, Australian National University Press, 1971.
 Hashimoto, Mantaro "Medieval Chinese in hP'ags-pa Script", Part 2, アジア・アフリカ言語文化研究 第10号 1975.
 崔世珍原録, 俞昌均再構『較定蒙古韻略』台北 成文出版社 1973.
- 23) ただし薬韻牙喉音〈合口〉については, その漢字が『中原音韻』に収録されていないので, 中古音との対応に関する具体的な状況はよくわからない.
- 24) なお, -wŋ・-wk のかわりに, 橋本教授の提唱される -ŋ・-t という捲舌音韻尾 (retroflex ending) を想定してはどうか (あるいは -wŋ・-wk は中古以前の -ŋ・-t から変化してできたものか) という考えもあるが, これについてはさらに考えていきたい.
- 25) 洛陽方言の例は, 趙月朋「洛陽方言詞彙」『方言与普通話集刊』第6本 所収 北京 文字改革出版社 1959, 崇礼・尚義方言の例は, 橋本萬太郎「中国語崇礼・尚義方言音字彙」アジア・アフリカ言語文化研究 第10号 1975 による.
- 26) 以下の反切で, () を附してそえたその漢字の声母の音価は, 筆者が『中州音韻』の声母に対して推定したものである.
- 27) 陸氏論文以外の参考文献としては, つぎのものがある:
 永島栄一郎「近世支那語特に北方語系統に於ける音韻史研究資料に就いて (続)」言語研究 第9号 1941.
 藤堂明保『中国語音韻論』(第4章, 資料の解説) 江南書院 1957, のちに『中国語音韻論——その歴史的研究』光生館 1980.
 西田竜雄「明末漢語の音韻体系」(『西番館訳語の研究』第2章) 1970.
- 28) 方言資料は, 以下に示すものによる:
 趙月朋「洛陽話浅説」, 戴磊「平度方言与普通話語音的異同及其対応規律」(『方言与普通話集刊』第2本, 1958), 奠陸「莒南方言」(同第6本), 「通化音系」吉林大学学報 (人文科学) 1959 (第4期).
- 29) 中古の薬韻牙喉音合口字が, i 介音をおとして直音化する場合と, i 介音をそのまま保って拗音になっている場合の二種類があり, その両者が同一言語内に併存するという状況は, 『古今韻会挙要』においても観察することができる. 同書によると, 前者の直音化した形は「郭字母韻」にはいり, 後者のほうはべつに「嬰字母韻」を形成している. 花登氏「古今韻会挙要考——韻類について——」参照.

〈附記〉 本稿は, 1980年7月26日の中国語学会関東支部例会 (於お茶の水女子大学) において「中国語の /-uau/ という韻母について」という題で発表したものを詳しくしたものである.